
死のクリスマスイブ

けせら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死のクリスマスイブ

【Nコード】

N6197Z

【作者名】

けせら

【あらすじ】

十年前に世界各国の首脳が集まり「世界統一宣言」が出された。それにより世界から戦争がなくなり人々は平和に暮らすようになった。だが、戦争の皆無、医学の進歩のため人口の増加は世界の大問題となっていた。国々は宇宙コロニー計画、海上人工大陸計画など独自の計画によって人口問題をクリアしようとしていた。日本もまた独自の政策を打ち出した。「特権者優遇計画」だった。毎年クリスマスの時期に一週間、国が指定した特権者、特命者を指定し、特権者に特命者や市民を殺害させるものだった。クリスマス間近の日

曜、風間克行のもとに特権者指定の通知が届けられる。

死のクリスマスイブ・1

—

十二月 十日（日）

クリスマスまであと二週間と迫っている。

今年は週末と重なることもあつてか、例年以上に街は盛り上がりを見せていた。気象庁の予報によると、ちょうど日曜のクリスマス・イブには雪が降るらしい。

街は十一月も半ばになると早々とクリスマスソングを流し、店先にはサンタクロースやクリスマスツリーを形取った商品が並び年末の一大商戦を繰り広げる。いまやクリスマスは正月以上に国民あがての一大行事となっていた。

風間克行はベッドのなか休日朝を、そして街の騒々しさを嫌気がさすほど十分に感じ取っていた。部屋は二時間も前から十分に暖まりベッドのなかには蒸し暑くさえ感じられるほどになっていた。そのベッドのなかで克行は毛布のなかに頭を突っ込み、光や音によって眠りを妨げられるのを避けようと試みていた。そうしておいて、しばらくの間暗闇のなかであくまでのんびりといういろいろなことを考え巡らせた。

（今年の正月は田舎で過ごすことにしよう）

（ボーナスの残りで何を買おう）

（年賀状を早めに書いておかないと）

どうでもいいことを考えることで頭をゆっくりと目覚めさせるつもりだった。しかし、その暗闇のなかにまでジングルベルが侵入してきた。

克行の住むマンションは商店街に面しており、嫌でも街の様子は聞こえてくる。すでにジングルベルは克行が目覚めてから数えても

二十回は鳴り響いている。目覚めの音楽としては少々賑やかすぎる。克行にとってクリスマスなどはどうでもよかったし、マスコミやデパートに勝手に煽動されるのも嫌だった。子供の頃からサンタクロースが嫌いだった。おそらくそれは風邪をひいて病院に行った時、そこに置いてあった雑誌に載っていたマンガの影響だろう。そこには豊かな白い髭を生やし、真つ赤な服と帽子を被った体格の良いサンタクロースが左手にナイフを、右手にイバラの鞭を持って二タニタを気味の悪い笑みを浮かべている姿が描かれていた。そして、別のページにはそのイバラの鞭でトナカイの背を血が出るまで打っている姿があった。その夜、熱にうなされている彼の夢のなかにその姿が現れたことは言うまでもない。

まったく、どうしてあんなものばかりが毎年騒々しく鳴り響くん
だ？

克行はうんざりしながら毛布のなかから頭を出すとやっと目を開
き時計を見つめた。

時計の針は十時を回っている。

約束は午後一時だ。十二時にここを出れば間に合うだろう。

五十嵐麻美から電話があったのは昨夜の三時過ぎで、克行はその
時ちょうど眠りにつきそうになった時だった。彼女は相変わらず夜
に強いところをしっかりと教えてくれた。

ごめんね、私ったらいつもこの時間に目が覚めちゃって……明
日休めるんでしょ。午後からでいいからいっしょに映画でも観に行
こう。

（ひょっとするとあれは夢だったかな？）

もしそうだとしたらそれほど楽なことはない。しかも、ここ一週
間の間、風邪で微熱が続いていて、やっと昨日になって熱がさがっ
たばかりだ。麻美に会うのも三週間ぶりで克行も会いたい気持ちは
あったが、今は少しでもゆつくりと休んでいたかった。

今年も終わりに近づき完全週休二日制も有名無実になっている。
克行の務める会社は決して大きな会社ではない。どこにでもあるよ

うな中小企業で大きなメーカーなどからの依頼によって、システムの設計や開発を行うことを主としている。それでも年末になると決算を睨んだ会社の上司や、正月明けを見越した顧客の注文によりこの時期が一番忙しくなる。

克行は手を延ばすとテレビのリモコンのスイッチを押した。買ったばかりの大型のステレオテレビは部屋の狭さなど気にならないようにまだ半分眠っている克行に対し情報の提示を行い始めた。どことなく会社の上司に似ている年配のアナウンサーがニュースをぶつきらばうに読んでいる。

朝から会社を思い出すようなそのアナウンサーの顔に克行はほんの少し嫌悪感を持った。特にその上司とは常に気が合わずに何度言い合いをしたことだろう。そのたびに『いまにその頭を叩き割つてやるからな』と心のなかで密かに毒づくのだった。

それでも克行はチャンネルを変えようとはせずに、ぼんやりと目覚し替わりにそのつくったような声を聞いていた。

次のニュースです。

突然、アナウンサーの声が重みを帯びたような気がして、克行はまだ少し眠い目を開けるとテレビに耳を傾けた。

今年もまた「特権者優遇計画」が実施されることになり、先日、特権者が決定されました。特権者に関しては内密に特権者に内示される予定になっています。

では次のニュースです。

アナウンサーは早々にそのニュースを打ち切ると次のニュースへと話題を移した。

そうか……今年もやってくるのか。

克行は憂鬱な思いにかられた。

「特権者優遇計画」

それは五年前政府が発表した究極といえる人口制御政策であった。今や人工増加は深刻な問題となり、十年前に世界各首脳による「世界統一宣言」によって一切の戦争放棄が誓われるに至って、人口

の増加は誰の目にも人類最大の問題になっていった。各国はその問題に頭を悩まし、それぞれ独特の解決手段を取っていった。ロシアのコロナ計画、アメリカの海上人工大陸計画などが次々に発表されていった。日本も一時期は小子化によって人工が激減した時期があったが、養育費保護などの政策も影響し、今では再び人工は増加しつつあった。そんななか日本政府は一つの人口削減計画を打ち出した。それは毎年ある特定の一週間の間、国や県、市などが一定の特権者を指定し、指定された特権者は市が選び出したリストを中心に自由に六名を削除　つまりは殺害することを許可するというものだった。そのリストに載る人々は俗に「特命者」と呼ばれていた。その多くは百歳を越える老人や犯罪を犯した者で構成されていた。ただ、それはあくまで市が選定した候補リストであり、特命者リストに含まれない一般市民が、時折は特権者までが殺害されることもまれにあった。

全国で何名の特権者が選ばれるのか、また、何名の特命者、一般市民が殺害されるのか、それは一切伏せられていたがそれでもかなりの人口削減につながっていることから見て、その一週間の間、相当の数の殺人が行われていると見て相違なかった。

マスコミは政府の弾圧によりほとんどそのことに関し触れることは出来ず、国民のほとんどはその悪魔のような政策を身近に感じることはなかった。だが、克行のように偶然その殺人行為の現場に居合わせたことのある人も決して少なくはなかった。

（くそ、つまらないことを思い出してしまった）

克行は一瞬感じた不快の思いをすぐ断ち切るように、ベッドから抜け出ると窓辺に近づき、外の様子を見下ろした。

厚手のコートを着こんだ主婦や男たちが忙しげに行き交っているのが見える。ここ二、三年は暖冬が続き、地球の温暖化が例年以上に騒がれていたが今年の冬はオゾンホールも例年より狭く、珍しく寒さが厳しいらしい。環境対策がうまくいっているということだろうか。

克行はそつと窓を少しだけ開けた。天気は良く、暖かそうな日ざしが街を覆っているが、それでも肌を刺すような冷えた外の空気が暖まっている部屋の空気を犯すかのように飛びこんでくる。克行はその冷たさにすぐに窓を閉めた。

ピンポーン！

突然、玄関の呼び鈴の音が部屋のなかに響き渡った。

「はい！」

克行はパジャマ姿のまま玄関まで行くと、レンズから外をそつと覗いた。若い郵便屋が寒そうに足踏みしながら立っている。その帽子の下からはアルバイトであることを証明するように黄色に染めた髪がのぞいている。

克行はチェーンを外すとドアを開けた。

「書留です、印鑑お願いします」

郵便屋は無愛想なまま趣味の悪いうすい紫色の封筒を差し出した。克行が急いで印鑑を取ってきて差し出し出された書類に印鑑を押すと、郵便屋は何も言わないまま黙って次の配達へと早足に進んで行った。

克行はドアを閉めると鍵とチェーンをしっかりとかけてから部屋へ戻った。「世界統一宣言」以来、外国人が増えこの日本も欧米なみに治安が乱れてきている。特に麻薬が昼間でもあちこちで取り引きされるようになり、警察の手にもあまるようになってしまっている。ということがよくテレビでも取り沙汰されるようになってい。そして、それが一つの原因ともなり、強盗、空き巣などが多発しており、克行でなくてもこのくらいの用心は今では当然となっている。克行は部屋に戻ると改めてうすい紫色の封筒を眺めた。克行の想像どおりその封筒は市役所からのものだった。

（なんだろう……）

市役所など選挙の時以外はまるで関係のないと思っていた克行は

不思議な面持ちで開封した。なかにはたった一枚の白い通知だけが入っていた。

だが、その通知を読んでいくうち克行は自分の顔からずっと血の気がひいていくのを感じていた。

『風間克行様

このたびは誠におめでとうございます。

今年も再び「特権者優遇計画」が実施されることにあいなりまして。今年はみごとあなたが特権者として市の指定を受けることと決定し、取り急ぎ連絡させていただきました。

なお、詳しいことにつきましては十二月十一日（月曜）、市役所内にてご説明させていただきますのでお忙しいなか申し訳ありませんが、午前十時までに身分証明書、印鑑をお持ちのうえお越しくださいますようお願いいたします。

市長』

克行には一瞬それが、自分自身の死亡通知書のように思えた。

なぜ自分が特権者なんか選ばれたのかわからなかった。

克行はしばらく通知を手にしたままぼんやりと考え続けていた。治ったはずの風邪が振り返したように体がかつかと熱く、そして全身がだるく感じていた。今眠れば間違いなくイバラの鞭を持ったサントクロースに出会うことが出来るだろう。

これはあくまで噂だが「特権者」というのはかなり市や国にとって模範的な市民、国民と認められた人物でそのほとんどは公務員が多いとのことだった。

都内の小さなコンピュータ会社に務める若干二十六歳の克行が特権者を選ばれるなどこれまで夢にも思わなかった。

（それなのに、今年は俺が特権者として人を殺すことになる……）
もちろん、特権者というからにはあくまでも権利であって放棄す

ることが出来ることになっているということは聞いていた。だが、その反面権利を放棄した者が、翌年は逆に特命者として選考されるという噂もまた克行は聞いたことがある。いずれにしてもそんな権利を望んでいる者は少ないはずだ。

テレビでは昨年からのアメリカの冷害によって米の供給量が需要を遥かに下回り、米価が以前国内だけでまかっていた頃の3倍にも跳ね上がるだろうというニュースをアナウンサーが深刻な顔で伝えていたが、今の克行にはそれはあまり重要なものには聞こえなかった。

（どうしたら……）

克行は麻美との約束の時間に遅れることにも気づかず、ただ呆然と立ちつくしていた。

死のクリスマスイブ・2

二

待ち合わせの時計台の下には、麻美だけでなく多くのカップルたちの姿を見ることが出来た。そのなかでも麻美は一際目をひく存在のように思われた。それともこれはその場に存在しているカップル全てがお互いをそう思っているのだろうか。

「どうしたのよ、あれほど遅れないように言っただでしょう」

麻美は三十分ほど遅れて待ち合わせの場所に現れた克行を見るなり怒ったようにふくれてみせた。丸い童顔に流行にとらわれないショートカットの髪、それに紺のコートが手伝い、とても二十四歳には見えない。以前にも学生と間違われたと言って喜んでいたこともあったほどだ。

五十嵐麻美とつき合うようになってからすでに二年がたとうとしていた。麻美は人材派遣センターに登録されており、克行がよく伺う顧客先に彼女が派遣されていたことをきっかけに知り合い、つき合うようになった。

麻美の全てを克行は愛していた。今では克行にとって最も大切な人ということが出来る。ただ一つ難点をあげるとすれば、それは麻美が飼っている猫のことかもしれない。どこから拾ってきたかわからないような黒猫のルシファー。決して猫が嫌いなわけではないが、あの野性を離れ人間に媚びて生き、それでいて人の顔を見るとベッドの下へ潜り込むような陰しさが克行には妙に気に入らなかった。あのルシファーの青い目を見るたびに心の奥底を覗かれるようなそんな不気味さがあった。

今、麻美のそばに当然ルシファーはいない。それでも気分はあまり良いとはいえなかった。麻美の顔を見れば心もなごむのではないかと思っていたが、心のなかに広がった暗雲はそう簡単に晴れては

くれなかった。

「ごめん……」

軽い鬱病にかかってしまったかのように、克行は暗い顔で頭をさげた。特権者優遇計画のことが頭から離れない。

「どうしたの？」

麻美はその克行の様子に、心配そうに克行の顔を覗き込んだ。

「い、いや……」

克行は麻美に特権者に指定されたことを隠すつもりだった。なぜだか、そのことが麻美に知られれば二人の仲が終わるようなそんな気がしたからだ。

「でも顔色が悪いわ。風邪、治ったんじゃないの？」

「大丈夫だよ。さあ、行こう。映画に遅れるだろう」

すると麻美は

「あ、実はそれ嘘なの。本当は三時半から。きっと克行のことだから遅れてくると思って早めの時間を伝えといたの。だから本当はまだちよっぴり時間があるの」

そう言って克行のジャケットの袖をそつと摘んで、いたずらつ子のような笑みを浮かべた。

「酷いな。そんなに遅れちゃいないだろう。時間までどうするんだ？」

「どこか喫茶店で休んでいきましょう。そうすればちよっぴいいわ。克行もそのほうがいいでしょ？ 映画までは元気になって、ちゃんと観られるようになってね」

麻美は克行の体にもたれかかると、克行を引っ張るようにして歩き出した。克行はそんな麻美を見つめながら、自分が特権者に指定されたことを麻美が知ったらどう思うだろうとしきりに考え続けた。

そんな克行の元氣のない様子に、麻美は口にこそ出さないものの密かに不安なものを感じているようだった。

二人は麻美の言うとおりに喫茶店で少しの間時間をつぶすと映画

館へと足を運んだ。最近、仕事のほうがあまりに急がしすぎて好きな映画を観ることもなかったので、克行にとつては映画館に足を運ぶのも久しぶりだった。だが、映画を観ながらも、どうしても克行は今朝の通知のことを忘れることが出来なかった。スクリーンと自分の間に常にあの白い用紙に印刷された文字がちらついて見える気がした。

「 今年はみごとあなたが特権者として ㍿

そんなもの俺は望んじやいない。

映画を観ている間中、克行はこれから自分がどうなってしまうのだろうという不安に取りつかれていた。

「 克行、どうしちゃったの？ やっぱりなんだか今日はいつもと様子が違うわ。何かあったの？ 」

映画が終わったあと入ったレストランで、麻美はまじまじと克行の顔を見つめた。すでに六時を過ぎ、外は暗くクリスマスシーズンにだけ光る街路樹に付けられたイルミネーションが美しく街を彩っている。

「 そうかな…… べつに何もないよ。最近忙しかったからちょっと疲れてるだけさ 」

克行は麻美が不思議がるのを避けるようにつぶやくと食後のコーヒーに手をのばした。実際に自分の今日の態度がいつもと違っていることは克行も気がついていていた。けれど、それを隠そうにも今の克行には隠しきれなかった。それほどまでにあの通知は克行の心をしめていたのだった。

（ どうしてあんな一枚の通知のために俺はこんなに苦しまなきゃいけないんだ！ ）

不安で微かに苛立っていた。

「 それならいいけど…… 仕事そんなに忙しいの？ 来週はともかく、再来週はちゃんと予定空けといてね。仕事で会えないなんてこと言わないでね 」

克行の心を解きほぐすそうとするかのように麻美はしきりに冗談

めいた口調で喋り笑顔をみせる。

「再来週？ 何かあったつけ？」

「やあね。冗談のつもり？」

「え？」

「クリスマスじゃないの」

美しい夢を見る少女のような口ぶりで麻美はつぶやいた。けれど、そのつぶやきさえも克行の耳には恐ろしい呪文のように聞こえ思わずグクリとした。その日こそが「特権者優遇計画」のメインともいえるフィナーレとなるのだ。人々はクリスマスの華やかさに心を奪われ「特権者優遇計画」などのことなどまったく忘れ去り、そして知らず知らずに何人もの特命者たちが凶弾に倒れることになる。

まるで

（鼠取り！）

このクリスマスのきらびやかな光が餌になるわけだ。今更ながらにクリスマスを利用する国のやり方に腹がたった。

「そうだね。もうすぐクリスマスなんだね」

弱々しく呟く克行を不思議そうに麻美は見つめた。

「どうしたの？ 本当に今日は変よ。クリスマスに嫌なことでもあるの？」

「いや、そうじゃないけど。ただ、今日部屋を出るときにちょっと嫌なニュースを見たんだ」

「嫌なニュース？」

「特権者優遇計画さ」

さりげなく言った克行の言葉に、さすがに麻美も少し表情を曇らせた。

「そう……そうね、もうすぐその季節だったわね」

特権者優遇計画のことを知らない者は世の中に誰一人としていないだろう。だが、誰もが極力口に出さないようにつとめているし、実際にはその当日まではほとんどの人たちが忘れてしまっている。また、もし口に出すことがあったとしても、単なる話題の一つとし

て喋るだけで、決してそれに対しての不平不満を語ろうとはしない。いつどこで誰がその話を聞いているか、そしてまたいつどこで自分が特命者リストに載るか分からない。そんな恐怖が知らず知らずのうちに心を支配しているのだ。克行も麻美も昨年まではそんな中の一人に過ぎなかった。

「何人くらいが対象になるんだろうな」

克行の何気ない言葉に麻美はびくりと体を震わせた。克行自身その言葉が特権者に対するものなのか、それとも特命者へのものなのかわからなかった。

「やめてよ、怖くなっちゃうじゃない」

そう言った麻美の顔が克行には少し青ざめているように見えた。

無理に笑顔をつくろうとする麻美が愛らしく見えた。

克行はそんな麻美の顔を見つめながら、ふとつぶやいた。

「もし僕が特権者に選ばれたとしたら……どうする？」

言ってしまうのか？ 言っても少しでも心の重みもとってしまいたい。克行の心の中にそんな衝動が走った。

「克行が？」

麻美は驚いたような目で克行の目をじっと見つめた。その目はひどく怯えていた。コーヒーに砂糖をいれようとする彼女の手がぴたりと止まった。

「例えばの話だよ」

「例えば？」

「そうさ、実際にそんなことあるわけないだろう」

麻美の怯えたような態度に克行は真実を語るのを避けた。あえて麻美に伝える必要はない。ほんの一週間のことだ。麻美を不安にさせる必要などない。何とか自分一人で全てを解決してみせる。

「やだ、そんな冗談言わないでよ。そんな話しても仕方ないわ。またいつもみたいに知らないうちに過ぎてゆくわよ。もうやめましょ、その話は」

麻美は再び笑顔をつくると話題を別のほうへもっていった。

（俺だってそう思いたい。だけど、今年だけは去年までのようには
いかないんだ）

克行は麻美の話に耳を傾けながらも心はいつまでも離れることが
出来ないでいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6197z/>

死のクリスマスイブ

2011年12月21日11時54分発行